

上級日本語・日本文化コース（AJLC）の 始まりから終わり

永井 智香子

キーワード：上級日本語、日本文化コース、有料

1. はじめに

国際教育リエゾン機構留学生教育支援部門（旧留学生センター、以下リエゾン機構）の独自の日本語・日本文化プログラムとしてまず、2004年に留学生センター交換留学生プログラム（以下 NUJALP¹）が始まり、2007年に上級日本語・日本文化コース（以下 AJLC）が始まった。どちらも協定校から1年間学生を受け入れるということで始まった点では同じだが、大きい違いがある。それは NUJALP が協定校から交換枠を使って受け入れるため、授業料不徴収であるのに対して、AJLC は協定校から交換枠を超えて派遣する学生を受け入れるので、有料のプログラム（1単位14,800円を徴収）だということである。

2007年の秋学期に始まった AJLC であるが、2016年の秋学期に受け入れた学生を最後に終わることとなった。2017年の秋学期より NUJALP に有料コースを設けて協定校から学生を受け入れているので、形を変えての発展的解消とも言えるが、なぜ終わることになったのか記録として残しておきたいと思い、AJLC の始まりから終わりまでを簡単に追ってみた。

2. AJLC の始まり

長崎大学では協定校から留学生を受け入れる全学的なプログラムとして英語による短期留学プログラム（いわゆる短プロ、以下 NISP²）が2004年に始まっており、当時、留学生センターは NISP のコーディネートをを行うとともに日本語・日本文化科目を NISP に提供していた。そして、AJLC の始まりは NISP に学生を派遣していた福州大学の外国語学院の方が長崎大学を訪問したことにある。長崎大学と福州大学の協定締結は平成4年に遡り、現時点

で約40校あまりある長崎大学の中国の協定締結校の中でも3番目に古く、その交流歴は長い。長崎大学を訪問した福州大学の方は交換枠を使ってNISP等に学生を派遣するだけでなく、有料でもよいので、交換枠を超えて、日本語学科の学生をさらに5名ほど派遣できないかと当時の留学生センター長とNISPのプログラムコーディネーターに話をもちかけたのである。その話を受け、留学生センターでは募集要項を作成し、合意書を交わし、正式にプログラムがスタートすることになった。つまり、AJLCは5名の福州大学外国語学院の日本語学科の学生を有料で受け入れることから始まったのである。

3. AJLCの発展

2007年の秋学期に5名の福州大学の学生を有料で受け入れることから始まったAJLCであるが、その後、発展していった。ここではプログラムの発展について、参加協定校の増加とプログラムの内容の充実にわけて説明したい。

3-1 参加協定校の増加

表1はAJLCの年度別（毎年秋学期に来日）参加大学と参加人数の推移を示したものである。表1からもわかるように2013年からは山東大学が、2016年からは天津科技大学が加わっている。山東大学の場合は山東大学から参加要請があり、受け入れることになった。天津科技大学の場合は2014年の9月に筆者と事務室のプログラム担当でAJLCへの参加を呼び掛けるために

表1 AJLC 年度別参加大学と参加人数の推移

年度	人数	参加大学
2007年	5名	福州大学5名
2008年	5名	福州大学5名
2009年	5名	福州大学5名
2010年	8名	福州大学8名
2011年	4名	福州大学4名
2012年	5名	福州大学5名
2013年	10名	福州大学5名、山東大学5名
2014年	8名	福州大学5名、山東大学3名
2015年	16人	福州大学6名、山東大学5名、天津科技大学5名
2016年	13名	福州大学7名、山東大学2名、天津科技大学4名

中国のいくつかの大学を訪問したことによるものである。その際にはAJLCに学生を派遣している福州大学と山東大学も訪問し、プログラムを充実させるべく、直接顔を合わせての話し合いを初めて持った。

3-2 プログラムの内容の充実

AJLCは最初の頭文字Aが示すように、上級の日本語クラスを中心に履修するプログラムである。AJLC生には来日後、そのレベルをはかるために日本語のプレースメントテストを実施するが、日本語レベルによって受講するクラスを分けることはしない。そのため、必修科目のクラスではAJLC生は必ず、全員そろろうということになる。

履修科目についてであるが、第一期生は2007年の秋学期に上級日本語科目を8コマ8単位、2008年の春学期に上級日本語科目を7コマ7単位履修した。福州大学は3年生を派遣して来るが、各学期7コマ～8コマでは読み替えができる単位数が少なすぎるので、増やせないかという要望が出された。そこで、2期生より、徐々に履修できる科目を選択科目として増やし、プログラムが終了する2017年の春学期までプログラムの充実を図っていくことになった。巻末の表2は1期生から10期生までの学生が履修した必修科目と選択科目を示したものである。その表からもAJLCの学生の受講可能な科目の増加が読み取れる。

リエゾン機構の日本語・日本文化プログラムにおいて、全ての履修科目をそのプログラムの学生だけのために開講する余裕はない。しかし、AJLCは有料のプログラムであるということで、第1期生と第2期生のときは日本事情演習、第3期生以降は日本研究というAJLCの学生だけのためのクラスを開講してきた。しかし、6期生からは日本研究という科目は他のプログラムの学生も履修するようになった。そこで、2015年の秋学期からは「日本研究Ⅰ総合」「日本研究Ⅱ総合」という名前でAJLC生だけの、いわばホームルームクラスと言えるクラスを開講した。2012年の秋学期までは学部正規留学生のための全学教養教育の日本語クラスを履修させていたが、2013年の春学期より、リエゾン機構で上級Ⅱ総合というクラスを開講するようになり、全学教養教育の日本語クラスを履修させることはなくなった。

2期生より春学期に教育学部国語科の専門科目が履修できるようになった。これは、中国の大学の3年生が履修する古典や日本文学関係の科目が必要であるという福州大学からの申し出を受け入れたもので、留学生センターから教育学部に履修を要請し、特別に許可を得ていたものである。教育学部の専門科目の履修は最後の10期生まで続いた。2015年の春学期からは教育学部国語科で履修できる専門科目が増え、さらに、多文化社会学部の日本語関連の

専門科目の履修も許されるようになった。また、2016年の春学期からは留学生に履修が許可されている、全学教養教育科目も自由に履修できるようになった。ただ、教養教育の科目は90分一コマで2単位のものが多く、AJLCの学生には金銭的負担が大きいため、他の交換プログラムの学生のように多くの科目を履修する学生はいなかった。

表2には示していないが、いくつかの無料の科目があった。まず、個別指導クラスである。5期生までは担当教員が週に1コマ、学生の希望に応じた授業をおこなっていた。次に、「日本の伝統文化」というクラスである。これは毎週ではないが、秋学期の15週の学期中に専門の講師を招き、最初は日本舞踊、着物、華道、茶道のクラスを1回ずつ開講した。その後、2014年の秋学期からリエゾン機構の専任教員の協力を得て、剣道、合気道、落語などの科目を増やして、充実をはかった。この科目は最後に実施したプログラム評価でも好評であった。もう一つは「1級対策講座」である。多くのAJLCの学生は日本滞在中に日本語能力試験のN1を受験する。これも15回開講するクラスではないが、試験の前までの、週に1回の授業であった。

その他、無料のものとして、秋学期にリエゾン機構の留学生のための雲仙島原への日帰りバス旅行があった。

最後に奨学金に関することであるが、6期生から10期生までは追加採択ではあったが、また、ある年を除いて全員に支給というわけではなかったが、JASSOの奨学金を得ることができ、有料のプログラムであるので、非常に有り難かったということをつけ加えておきたい。

4. AJLCの問題点

AJLCは参加大学も増え、プログラムの内容も年を追うごとに充実してきたが、一方で大きい問題が生じていた。

まず、クラスサイズの問題である。前述のように、AJLCはプレースメントテストによってレベル別に分かれないうプログラムであるので、AJLCが入る必修科目の1クラスの人数が多くなったのである。2015年の秋学期のAJLCの人数は16名である。2015年の秋学期と2016年の春学期のAJLCの必修科目となっているクラスはだいたいどこも20名から30名となった。さらに、2016年の秋学期のAJLCは13名と少し減少しているが、一方でNUJALPの学生がアジアを中心に急増し、AJLCの必修科目では30人を超えるクラスも

珍しくなくなった。語学のクラスで1クラス30人を超えるのは、その教育効果から考えてもよくないことは明らかである。また、AJLCの学生は高い授業料を払っているのに、一クラスの人数が多すぎると苦情が寄せられても仕方がないという状況にあった。

問題はクラスサイズだけではなく、AJLCが続けられなくなった最も大きい原因は教育学部国語科の専門科目が受講できなくなったことにある。近年、長崎大学では学部所属の交換留学生在が急増している。母国で日本語・日本文化を専攻している学生は教育学部所属の交換留学生として長崎大学に来る場合も少なくない。そのような学生は教育学部国語科の日本語関連科目を履修する。教育学部では留学生の増加により、国語の教員を目指す日本人学生の教育に支障をきたすようになってきたのである。そこで、2017年の春学期からリエゾン機構に所属する留学生は教育学部の専門科目を履修できないことになった。その解決策として、リエゾン機構独自に古典や日本文学などの留学生向けの専門科目が開講できればよいが、資金的に無理であった。AJLCは他学部の開講科目により成り立っていたプログラムだったのである。それまでさまざまなAJLCの問題解決策をさぐってきたが、教育学部の専門科目を履修できないとわかった時点で、AJLCの終了が決定的となった。

5. NUJALP との統合に向けて

AJLCを存続させる道を探ってきたが、最終的に終了と決まったのは2016年の年末であった。しかし、2016年の秋学期に受け入れた学生は責任を持って送り出す義務があった。教育学部に事情を説明した結果、2017年の春学期だけ、特別に国語科の専門科目の履修が認められた。

急遽NUJALPとの統合について話し合われた結果、NUJALPに無料コースと有料コースの二つを設けることになった。NUJALPでは教育学部の専門科目の受講が認められないので、そのまま移行するというわけにはいかない。しかし、NUJALPでは2015年ごろから留学生に履修が許可された全学教養教育科目を履修することができた。それらの科目の中には日本語や日本文化に関連したものもある。教育学部国語科の専門科目に準ずるものとも考えることも可能である。

こうして、AJLCは2017年の秋学期より、NUJALPの有料コースとして再出発することになった。2018年の春学期より、NUJALPは名前を長崎

大学日本語・日本文化プログラム (JLCP) と名前を改め、プログラムの充実をはかっている。

5. おわりに

2017年の2月に筆者とリエゾン機構の副機構長とリエゾン機構事務室のAJLC担当者はAJLCに学生を派遣してくれている3大学の担当者に直接会い、事情を説明するために中国に行った。筆者らの説明にときおり厳しい表情も見られたが、理解を示してくれた。そして、新しくNUJALP (JLCP) に組み込まれる有料コースについても、教育学部国語科の専門科目は履修できないが、履修可能な日本語や日本文化関連の全学教養教育科目を示しながら説明した。

果たして、2017年の秋学期にNUJALPの有料コースに学生を派遣してくれるかと懸念されていたが、福州大学は6名、山東大学は3名、天津科技大学は5名の学生を派遣してくれた。合わせて、上海海洋大学も3名、有料コースに学生を派遣してくれた。非常に有り難いことである。

2017年度秋学期からNUJALP (JLCP) の科目として、「日本の伝統文化」という科目が単位化された。また、非常勤講師のコマの調整がうまくいき、2018年度より「茶道」「日本のアニメ」「日本文学」が専門の講師により開講されることになった。さらに、一クラスの人数を減らすために、「日本研究」という科目は同じ名前のクラスを同じ時間帯に同時に2クラス開講するということも実施している。

何かと変化が多い昨今ではあるが、少なくとも2018年度はAJLCがその形を変えて組み込まれている、充実した内容の日本語・日本文化プログラム (JLCP) が実施できている。

注

- 1) NUJALPはオランダのライデン大学からの要請により2004年に始まった留学生センター独自の1年間の交換留学プログラムである。
- 2) NISPもAJLCと同時期の2017年の春学期に終了した。

表2 AJLC 年度別履修科目 括弧内の数字はコマ数(単位数)、*はAJLC独自の科目、○印よりあとは選択科目、(教)は教育学部専門科目、(多)は多文化社会学部専門科目、(全)は全学教養教育日本語科目

1期生	2007年 秋学期	(全) 上級日本語A (2)、(全) 上級日本語B (2)、(全) 上級日本語C (2)、*日本事情演習A (1)、*日本事情演習B (1)
	2008年 春学期	(全) 上級日本語D (2)、(全) 上級日本語E (2)、(全) 上級日本語F (2) *日本事情演習C (1)
2期生	2008年 秋学期	(全) 上級日本語A (2)、(全) 上級日本語B (2)、(全) 上級日本語C (2) *日本事情演習A (1)、*日本事情演習B (1)
	2009年 春学期	(全) 上級日本語D (2)、(全) 上級日本語E (2)、(全) 上級日本語F (2) *日本事情演習C (1)、*日本事情演習D (1) ○(教) 国文学概論 (1)、(教) 文章表現 (1)
3期生	2009年 秋学期	上級I 読解 (2)、上級I 会話 (1)、上級I 作文 (1)、上級I 聴解 (1)、*日本研究A (1)、*日本研究B (1) ○(全) 上級II A (2)、(全) 上級II B (2)、(全) 上級II C (2)
	2010年 春学期	*日本研究C (1)、*日本研究D (1)、*日本研究E (1)、(全) 上級II D (2)、(全) 上級II E (2)、(全) 上級II F (2) (3科目の上級IIのうちから2科目選択必修)、○上記の選択しなかった上級II (2)、1級対策講座 (1)、(教) 国文学概論 (1)、(教) 文章表現 (1)
4期生	2010年 秋学期	上級I 読解 (2)、上級I 会話 (1)、上級I 作文 (1) 上級I 聴解 (1)、*日本研究I 人間と文化(1)、*日本研究I 言語と社会(1)、○(全) 上級II 読解
	2011年 春学期	*日本研究II 人間と文化 (1)、*日本研究II 言語と社会 (1) *日本研究III 総合、(全) 上級II 聴解 (2)、(全) 上級II 発表法 (2)、(全) 上級II 総合 (2) (3科目の上級IIのうち2科目必修)、○、上記の選択しなかった上級II (2)、(教) 国文学概論 (1)、(教) 古典文学 (1)、国文学史 (1)、
5期生	2011年 秋学期	上級I 読解 (2)、上級I 会話 (1)、上級I 聴解 (1)、*日本研究I 人間と文化 (1)、*日本研究言語と社会 (1)、(全) 上級II 読解 (2)、(全) 上級II 総合 (2) (2科目の上級IIのうち1科目を選択)
	2012年 春学期	日本研究II 言語と社会 (1)、日本研究II 人間と文化 (1)、日本研究III 総合 (1)、(全) 日本語上級II S-1 (2)、(全) 日本語上級II S-2 (2)、○(教) 古典文学 (1)、(教) 国文学概論 (1)、(教) 国文学史 (1)
6期生	2012年 秋学期	日本研究I 人間と文化 (1)、日本研究I 言語と社会 (1)、上級I 読解 (2)、上級I 会話 (1)、上級I 総合 (1)、(全) 日本語上級II A-1 (2)、(全) 日本語上級II A-2 (2) (2科目の上級IIのうち1科目を必ず選択)

上級日本語・日本文化コース (AJLC) の始まりから終わり

6期生	2013年 春学期	日本研究Ⅱ言語と社会 (1)、日本研究Ⅱ人間と文化 (1)、日本研究Ⅲ総合 (1)、上級Ⅱ総合C (2)、上級Ⅱ総合D (2)、○ (教) 古典文学 (1)、(教) 国文学概論 (1)、(教) 国文学史 (1)、
7期生	2013年 秋学期	日本研究Ⅰ人間と文化 (1)、日本研究Ⅰ言語と社会 (1)、上級Ⅰ会話 (1)、上級Ⅰ読解 (2)、上級Ⅰ総合 (1)、上Ⅱ総合A (2)、○上級Ⅱ総合B (2)
	2014年 春学期	日本研究Ⅱ人間と文化 (1)、日本研究Ⅱ言語と社会 (1)、日本研究Ⅲ総合 (1)、上級Ⅱ総合C (2)、上級Ⅱ総合D (2)、○ (教) 古典文学 (1) (教) 国文学概論 (1)、(教) 国文学史 (1)
8期生	2014年 秋学期	日本研究Ⅰ人間と文化 (1)、日本研究Ⅰ言語と社会 (1)、上級Ⅰ会話 (1)、上級Ⅰ読解 (2)、上級Ⅰ総合 (1)、上級Ⅱ総合A (2) ○上級Ⅱ総合B (2)
	2015年 春学期	日本研究Ⅱ人間と文化 (1)、日本研究Ⅱ言語と社会 (1)、日本研究Ⅲ総合 (1)、上級Ⅱ総合C (2)、上級Ⅱ総合D (2)、○ (教) 古典文学 (1) (教) 国文学概論 (1)、(教) 国文学史 (1)、(教) 音声言語 (1)、(教) 文章表現 (1)
9期生	2015年 秋学期	日本研究Ⅰ人間と文化 (1)、日本研究Ⅰ言語と社会 (1)、*日本研究Ⅰ総合 (1)、上級Ⅰ会話 (1)、上級Ⅰ読解 (2)、上級Ⅰ総合 (1)、上級Ⅱ総合A (1)、○上級Ⅱ総合B
	2016年 春学期	日本研究Ⅱ人間と文化 (1)、日本研究Ⅱ言語と社会 (1)、*日本研究Ⅱ総合 (1)、上級Ⅱ総合C (2)、上級Ⅱ総合D (2)、○ (教) 古典文学 (1)、(教) 国文学概論 (1)、(教) 国文学史 (1)、(教) 音声言語 (1)、(教) 文章表現 (1)、(多) 日本語からたどる文化 (1)、留学生に履修が許可されている全学教養教育科目
10期生	2016年 秋学期	日本研究Ⅰ人間と文化 (1)、日本研究Ⅰ言語と社会 (1)、*日本研究Ⅰ総合 (1)、上級Ⅰ会話 (1)、上級Ⅰ読解 (2) ○上級Ⅱ総合A (2)、上級Ⅱ総合B (2)、留学生に履修が許可されている全学教養教育科目
	2017年 春学期	日本研究Ⅱ人間と文化 (1)、日本研究Ⅱ言語と社会 (1)、*日本研究Ⅱ総合 (1)、上級Ⅱ総合C (2)、上級Ⅱ総合D (2)、○ (教) 古典文学 (1)、(教) 国文学史 (1)、(教) 音声言語 (1)、(教) 国語学概論 (1)、留学生に履修が許可されている全学教養教育科目

(国際教育リエゾン機構 准教授)